

名古屋の街が発展を始めた尾張徳川家初代義直の時代、家康は元和2年（1616）4月17日に75歳で病歿しました。家康の遺骸は久能山東照宮に葬られ、後に日光東照宮に移されました。名古屋城内にも家康を守護神として名古屋東照宮が元和5年（1619）に創建されました。当社の祭礼は、「名古屋祭」と呼ばれて江戸時代の名古屋随一の祭礼となり、他国の祭礼と比較しても特色ある壮大な規模でした。ことに絡繰人形を備えた山車の行列は、華やかで全国に誇る最高技術を備えていました。明治維新と戦災によって名古屋東照宮と祭礼の賑わいは、大きく失われましたが、開府400年の今年、今に残る品々を集めて往時の姿を振り返ります。

No.	名 称	時代	世紀(年号)	所蔵者
-----	-----	----	--------	-----

## 一 家康をまつる

1	徳川家康画像(東照大権現像 模本)	桜井清香模写	昭和	昭和12年<1937>	**
2	神号「東照大権現」	徳川義直(尾張徳川家初代)筆	江戸	17	**
3	名古屋東照宮扁額「東照大権現」	二枚	江戸	17	密蔵院
4	名古屋東照宮別当尊寿院棟札	元和五年銘 二枚	江戸	元和5年<1619>	密蔵院
5	名古屋東照宮華鬘	元和五年銘 二枚	江戸	元和5年<1619>	密蔵院
6	名古屋東照宮釣灯籠	元和五年銘 二基	江戸	元和5年<1619>	密蔵院
7	薬師如来坐像	名古屋東照宮本地仏	江戸	17	密蔵院
8	日光菩薩立像	名古屋東照宮本地仏脇侍	江戸	17	密蔵院
9	名古屋東照宮懸仏	三面	江戸	17	密蔵院
10	冠 附 梨子地芦雁蒔絵冠箱	名古屋東照宮御神宝の内	江戸	17	名古屋東照宮
11	笏 附 螺鈿笏箱	名古屋東照宮御神宝の内	江戸	17	名古屋東照宮
12	太刀 銘国行		鎌倉	13	名古屋市博物館
	附 梨子地桐葵紋蒔絵太刀拵	旧名古屋東照宮御神宝			
13	色々威具足	徳川家康近侍所用	桃山	16	名古屋東照宮
14	東照宮縁起絵巻	五巻の内	江戸	寛政6年<1794>	名古屋東照宮
15	葵紋瓦・龍飾り瓦	名古屋城三の丸遺跡御霊屋出土	江戸	18	見晴台考古資料館
16	名古屋東照宮図		江戸	慶応3年<1867>	*
17	尾張名所図会 巻一	名古屋東照宮祭礼	江戸	天保15年<1844>	**
18	名古屋東照宮祭礼留		江戸	文政5年<1822>	**
19	名古屋東照宮祭礼図巻 第二巻	森高雅筆 七巻の内	江戸	19	名古屋市博物館
20	名古屋東照宮祭礼図巻 第三巻	同 上	江戸	19	名古屋市博物館

## 二 華麗なる祭礼図巻

21	名古屋東照宮祭礼図巻	総巻 森高雅筆	九巻の内	江戸	文政5年<1822>	**
22	名古屋東照宮祭礼図巻	第一巻	同 上	江戸	同上	**
23	名古屋東照宮祭礼図巻	第二巻	同 上	江戸	同上	**
24	名古屋東照宮祭礼図巻	第三巻	同 上	江戸	同上	**
25	名古屋東照宮祭礼図巻	第四巻	同 上	江戸	同上	**
26	名古屋東照宮祭礼図巻	第五巻	同 上	江戸	同上	**
27	名古屋東照宮祭礼図巻	第六巻	同 上	江戸	同上	**
28	名古屋東照宮祭礼図巻	第七巻	同 上	江戸	同上	**
29	名古屋東照宮祭礼図巻	第八巻	同 上	江戸	同上	**
30	名古屋東照宮祭礼図巻	鬼頭道恭筆		江戸-明治	19	**

\* は名古屋市蓬左文庫所蔵、\*\* は徳川美術館所蔵。

No. 名 称 時代 世紀(年号) 所蔵者

三 祭礼行列と城下町名古屋

1	名古屋東照宮祭礼図巻 第五巻 森高雅筆七巻の内	江戸	19	名古屋市博物館
2	名古屋東照宮祭礼図巻 第六巻 同上	江戸	19	名古屋市博物館
3	名古屋東照宮祭礼図 「張州雑志」付図 内藤東甫編・筆 百冊の内	江戸中期	18	*
4	寿老人面 大脇栄津子氏寄贈	江戸	18-19	名古屋市博物館
5	東照宮御祭礼記 大脇栄津子氏寄贈	江戸	19	名古屋市博物館
6	林和靖車山車人形 前人形 鬼頭二三作	江戸	寛政8年<1796>	清須市東六軒町町内会
7	橋弁慶車山車人形 牛若頭	江戸	18	名古屋東照宮
8	橋弁慶車山車人形 弁慶頭	江戸	18-19	名古屋東照宮
9	橋弁慶車山車人形 地人形頭	江戸	18	名古屋東照宮
10	筒井町天王祭湯取車緋萌黄・大幕	現代	平成4年<1992>	筒井町湯取車保存会
11	筒井町天王祭湯取車雲龍紋刺繍水引幕	現代	平成4年<1992>	筒井町湯取車保存会
12	糸からくり 牛若・弁慶		昭和 20	**
13	東照宮祭の山車 木・紙製 九輻の内	昭和	20	名古屋市博物館
14	東照宮祭山車 土人形 九輻の内	昭和	昭和52-56年 1977-81	名古屋市博物館
15	帯 祥纏用 二本	明治	19-20	名古屋市博物館
16	扇子 石橋車・湯取車配布 三本	明治	19-20	名古屋市博物館
17	肩衣	昭和	20	名古屋市博物館
18	名古屋東照宮神車山車引出シ之図	明治	明治18年<1885>	**
19	初夢土鈴 名古屋東照宮配布	昭和	昭和12年<1937>	**
20	御祭礼諸事目案	江戸	享保18年<1733>	*
21	御祭礼諸入用勘定帳	江戸	天保11年<1840>	*
22	御祭礼役割致置事(諸辻警固につき)	江戸	19	名古屋市博物館
23	引合用(祭礼諸入用につき)	江戸	19	名古屋市博物館
24	御祭礼持提帳	江戸	文化12年<1815>	名古屋市博物館
25	御祭礼掟	江戸	慶応3年<1867>	名古屋市博物館
26	覚(はり、けた等銘々預りにつき)	江戸	明和5年<1768>	名古屋市博物館
27	祭礼覚留帳	江戸	安永3年<1774>	名古屋市博物館
28	東照宮祭典実況 六枚の内	明治	明治43年<1910>	名古屋市博物館
29	東照宮祭礼写真 七枚の内	明治	19	名古屋市博物館

\* は名古屋市蓬左文庫所蔵、\*\* は徳川美術館所蔵。



囃子方(山車の中)

車引(綱曳)

## 名古屋東照宮

元和2年(1616)4月17日に75歳で薨去した徳川家康を「東照大権現」として祀る神社で、同5年9月に家康の九男・尾張徳川家初代義直によって名古屋城三の丸に創建された。義直の家康に対する信仰は篤く、東照宮を領国に勧請して建立したのは、大名では義直が最初である。東照宮は家康の側近であった天海によって推進されたため、天台宗の教えを踏まえた山王一実神道による、薬師如来を本地仏とする神仏習合の神社であった。

### 東照宮

徳川家康の神号(神としての称号)は「東照大権現」である。「権現」とは「かり(権)に姿を現わす」、すなわち仏が神に姿を借りて現われたことを示している。

元和2年7月、朝廷から幕府に対し、故家康に追贈する神号を権現と定める通知があった。幕府は東照大権現・日本大権現・威霊大権現・東光大権現の4案から東照大権現を選び、朝廷に奏請して勅許を得た。翌年2月、久能山の家康廟に勅使が遣わされ、正式な家康の贈り名となった。この後正保2年(1645)に、朝廷から「東照宮」号が贈られ、東照宮が正式な神号となった。

### 東照宮祭

東照宮の祭りは家康の三回忌に当たる元和4年から始められた。翌5年には社殿が、翌6年には御旅所が若宮八幡社の北に設けられ、同年4月17日に神幸(御輿渡御)の行事がおこなわれた。この時神輿の行列に、西行桜の能人形を載せた七間町の山車が加わったと伝えられている。

寛永7年(1630)には京都の朝廷から雅楽を奏する楽人を招いて道楽(行列の道中演奏される音楽)を演奏させた。のちに楽人13人に命じて、祭礼の前日に、神前で舞楽を奉納させるのが恒例となった。

祭礼前日の16日は、神輿は祭文殿に渡御して、神前で舞楽や別当・尊寿院の僧侶の読経などの神事が行われた。当日の17日には徳川家当主の社参が早朝に行われ、その後当主は城内三の丸の厩に設けられた上覧所にて祭礼行列を見物するのが常であった。行列の通る町並みには竹矢来が組まれ、前夜から待機していた神輿や山車・風流・練り物など総勢6800余人による行列が御旅所へ渡り、そこで舞楽を奏し、東照宮へ還御という次第であった。

東照宮祭には山車が出るのが通例で、宝永4年(1707)までに9台の山車が作られるに至った。名古屋城下の各町が所有していた山車は、戦災により全て焼失したが、戦前に桑名町から湯取車が売却されていたため、現在では東区筒井町に1台を残すのみとなった。

江戸時代を通じて、東照宮祭は天王社の天王祭と若宮八幡社の若宮祭とならんで名古屋三大祭りとなされた。なかでも東照宮祭は、江戸時代後期の天保年間(1830~1844)までには名古屋最大の祭りとなり、戦前まで「名古屋祭り」といえばこの東照宮祭を指していたという。東区筒井町4丁目に譲られ、今も筒井町の山車として活躍しています。



雷神車(上畠町)



湯取神子車(桑名町)



二福神車(上長者町)



小鍛冶車(京町)



石橋車(中市場町)



林和靖車(伝馬町)



猩々車(本町)



橋弁慶車(七間町)



唐子遊車(宮町)